

# 「カテゴリー化」と集団機能<sup>1)</sup>

柿本敏克

## 1. カテゴリー化と集団成員性

### 1.1. はじめに

本稿では社会的アイデンティティ理論 (Tajfel, H. *et al.*, 1979)、および自己カテゴリー化理論 (Turner, *et al.*, 1987) に基づく集団 (間関係) 研究のなかで見いだされてきた諸現象を論及の対象としつつ、カテゴリー化がいく種類かの集団機能<sup>2)</sup> に与える影響の諸相を論じる。

### 1.2. カテゴリー化と社会的カテゴリー化

一般にカテゴリー化とは、環境世界を範疇化することによってそこに意味と秩序をあたえる認知作用を指す。われわれを取りまく環境は適切なまとまりに分節化され認識されることによってはじめて、そこでの人の適応的な行動が可能になるのであるが、カテゴリー化はこれを可能にするメカニズムであると言うことができる。この作用は、同じカテゴリーとして一つにくられた事物どうしの類似性の強調と、異なるカテゴリーに属する事物間の差異の過大視を引き起こすことが知られている (Tajfel, H. *et al.*, 1963 等)。

ここで認識対象が人びとや人びとの形作る集団などの社会的事物である場合に、この認知作用は特に社会的カテゴリー化と呼ばれる。この社会的カテゴリー化は、社会生活のさまざまな場面で単に外的な刺激としての社会的事物を対象とするだけでなく、認識者自身をもその対象とすることになる。そのため、結果として社会的カテゴリー化は、人が自分自身を自分自身の含まれるカテゴリーの一員として認識するにあたっての認知的な基礎条件となっていると言える。論点を先取りして述べるなら、それゆえにこの社会的カテゴリー化は人の集団成員性の認識の、そして同時に集団間関係の認識の基礎条件の1つともなる。何故なら、社会的カ

テグリー化はそれを行なう認識者自身をそこに巻き込み、「我々」(内集団)と「彼ら」(外集団)という2つの集団への分類を引き起こすことになるからである。

### 1.3. ヒトと集団および集団の認識

種としてのヒトはその成り立ちからそもそも集団的性質をもつのだという仮説が提出されている。すなわち、種としてのヒトの持つ形質上の特徴である大脳新皮質の相対的比率の大きさは、ヒトが比較的大きなサイズの群れ(集団)生活に適応してきたことと関連があるというものである(Dunbar, R. I. M., 1997等)。この仮説はその当否を実証的方法で検討できるような類のものではないが、ヒトにとっての集団の重要性を考える上でこれが興味深い仮説となっていることは間違いない。ひるがえって身近な現実の人びとの日常生活に目を向けるならば、そこで人びとが何らかの集団の一員として振舞う様子を観察することは極めて容易である。学級、趣味のサークル、友人集団、家族などは多くの人に関わる(ないしは関わったことのある)身近な集団の例であろう。実態として、集団は人にとって基本的な存在であると言って間違いない。

このように人にとって基本的な存在である集団は、それを対象とした認識にあたって機能する心理的プロセスという点から眺めると、前項で述べた社会的カテゴリー化の作用によってもたらされるものと考えてよいであろう。すなわち、人びとを(複数の)カテゴリーに分けて認識する作用の結果、人びとの集合体が「集団」として認識されるに至る訳である。もちろんこうした認知プロセス以外にも社会規範、現実的利害、その他もろもろの要素が「集団」に対する認識を支える諸側面となっているであろうが、本稿ではそれらには部分的に触れるのみとする。

さて、こうした基本的な存在としての集団にはさまざまな機能を読み取ることができるが、本稿ではそのうち、主として複数の集団が存在する状況における、人の集団成員としての行動—集団間行動—の諸相を取り上げる。本節の残りの部分では、集団に属することによって生じる影響の基本的なものとその応用例をいくつか紹介し、つづく第2節では、集団間関係の基礎概念について論じる。第3節では、集団同一視をキーワードとしたこの研究領域の近年の展開について述べる。

### 1.4. 社会的カテゴリー化と集団成員性

人がある集団にその一員として属することを集団成員性(group membership)という。人が自分自身の集団成員性を意識する場合を取り上げ、これを先

述の用語で表現するならば、社会的カテゴリー化が認識する当人をまきこんで自己をある集団の一員と認識するにいたるのだと言える。そして、当人がこの集団成員性を意識することが、これにともなうさまざまな心理学的作用の基礎となる。換言すると、集団の諸機能を心理学観点から記述する時に、その基礎となるのが集団成員性の認識であるということになる。

例えば本稿では詳述しないが、集団成員が多かれ少なかれ共有する基準・ルールを集団規範 (group norm) と呼ぶが、これは集団に所属する成員が集団の一員として行動し、判断する際の基準となる。この集団規範のために同じ集団に属する人々には行動様式や考え方に類似性が見られることになる。このことを逆方向から見ると、所属する集団が異なれば集団規範の違いに応じて行動様式や考え方、さらには現実認識そのものも異なることが示唆されることになる。そしてこのことは同時にまた、自分の所属する集団 (内集団) の成員から受ける社会的影響 (social influence) が、自分が所属しない集団 (外集団) の成員からのものよりも強くなることを推測させる。内集団成員と外集団成員とでは現実認識の共有度に差があるためである。こうした影響のあり方は準拠情報的影響 (referent informational influence) と呼ばれる (Turner, J. C. *et al.*, 1987)。

### 1.5. 自己ステレオタイプ化と血液型性格判断、日本人論

人は安定した生活環境のもとではある程度安定した自己像を抱いていると思われるが、他方で自己のもつ諸側面のどの部分が強調されるかにより、ときどきに異なる自己イメージが現われることがある。集団成員性 (と、後述のようにそれが自己概念の中に取り込まれたものとしての社会的アイデンティティ) はこのときにも重要な役割を果たす。何らかの理由で特定の集団の一員としての自己概念の側面が顕著になると、その集団のイメージに合致する自己像が強調されることになる。これを自己ステレオタイプ化と呼ぶ (Turner, J. C. *et al.*, 1987 等)。日本国内では ABO 式血液型に基づく誤った性格判断が一般に流布しているが、これも一部は自己ステレオタイプ化が適用された結果といえるかも知れない。

例えば、「〇〇型の人は XX という特徴をもつ」と言う俗信なりステレオタイプなりを持つ人が、自分自身の血液型が〇〇型であるということに注目すると、自己ステレオタイプ化の適用により、〇〇型の人びとの集団に対してもつイメージ (すなわち XX の特徴をもつというイメージ) に合致する自己イメージを強調した自己認識をしてしまう傾向が生じる。その結果、元の「〇〇型の人は XX の特徴をもつ」と言う俗信なりステレオタイプなりが自分自身にも当てはまるという判断がなされ易くなり、さらにこのことによりその俗信なりステレオタイプ

内容の正しさについての信念が一層強化されようになるであろう。佐藤(1999)は血液型性格判断を、それぞれの血液型に該当する人たちに対するステレオタイプという観点からとらえているので、上述のようにそれを自己ステレオタイプ化が適用された結果である見る本稿の考え方と一部重なる。本稿の自己ステレオタイプ化適用説は、佐藤(1999)のアイデアを自己イメージに関して展開したものということもできるであろう。

近年「日本人は集団主義者である」という通説についての批判的検討が我が国の社会心理学界や関連領域で盛んになされているが(北山、1999、高野ら、1997; 濱口、2003等)、この集団主義者という日本人の自己イメージも同様に、自己ステレオタイプ化の結果と解釈することができるかも知れない。すなわち、「日本人は集団主義者である」という通説ないしステレオタイプを信じている人が、自分自身が日本人であるという側面に注目すると、自己ステレオタイプ化が適用されることで、日本人(たち)という集団に対して持つイメージ(すなわち集団主義者であるという特徴)に合致する自己イメージを強調した自己認識をしてしまう傾向が生じる。その結果、元の「日本人は集団主義者である」という通説なりステレオタイプなりが自分自身にも当てはまるという判断がなされ易くなり、さらにこのことによって、その通説なりステレオタイプなりの内容の正しさについての信念が一層強化されるようになる、という解釈である。

日本では血液型性格判断も、日本人の集団主義者イメージも過去何十年にもわたり持続しており今後も簡単になくなりそうにないが、その理由として、上述のような自己ステレオタイプ化の機能の強力さが与っている可能性もある。

## 2. 集団間関係

### 2.1. 社会的アイデンティティ理論と集団間関係

前節では社会的カテゴリー化と集団成員性を中心に据えつつ、そこから派生するいくつかの集団機能について触れたが、本節ではこれが複数の集団が存在する状況—集団レベルで見た場合、それは集団間関係と呼ぶことができる—で、いかなる機能をもつに至るのかについて、簡単に論じる。

集団間関係についての研究は、現実的集団葛藤理論(cf. Campbell, D. T., 1965)や社会的認知研究などの影響を受けつつ、1970年代以降主としてヨーロッパ社会心理学の伝統の中で発展してきた。この領域の理論的枠組みとして考案され、これまでに強い影響力をもってきたのが既に触れた社会的アイデンティティ理論(Tajfel, H. *et al.*, 1987)である(柿本、2001に解説がある)。これまで

そこで焦点とされてきたのは、集団間に現われる各種の関係のうち、伝統的に対立関係に関わる諸側面に関するものが中心であった。近年でも、熊谷ら (Kumagai, T. *et al.*, 2001, 2006 等) は集団間の対立関係の具体的現れの一つである集団間の攻撃行動が、正に社会的アイデンティティ理論の枠組みでうまく説明されることを一連の実験研究により示している。以下ではこの理論に基づいて、集団機能の展開したものとしての集団間関係の基礎概念を、重要なものしばって解説する。

## 2.2. 社会的アイデンティティと社会的行動

自分はこれこれのような人間であるといった自分自身についての考えを自己概念 (self-concept) と呼ぶ。先に述べた集団成員性はしばしばこの自己概念の一部になっており、自己概念のこの側面は社会的アイデンティティ (social identity) と呼ばれる。例えば自分は〇〇大学の学生である、XX 家の一員であると認識しているような場合がそれにあたる。タジフェルら (Tajfel, H. *et al.*, 1979) が提出した社会的アイデンティティ理論によれば、すべての社会的行動はこの社会的アイデンティティに純粋に基づく極と、個人レベルのアイデンティティに純粋に基づく極とを両端とする連続帯のどこかに位置づけられる (Tajfel, H. *et al.*, 1979)。つまり、純粋に個人的アイデンティティに基づくものを除けば、ほぼすべての社会的行動には多少なりとも社会的アイデンティティに基づく部分を含むことになる。また社会的アイデンティティ理論の発展型としての自己カテゴリー化理論 (Turner, J. C. *et al.*, 1987) によれば、ある状況において人がその自己概念のうちのどのレベルに基づき行動するかは、その自己概念のうちのどの部分が顕著 (salient) になるかによって決まるとされる。集団間の敵対関係や競争意識などは、集団レベルの自己概念を顕著にさせるため、その集団レベルの社会的アイデンティティに基づいた行動を生じさせ易くすると考えられる。

## 2.3. カテゴリー化、集団成員性、社会的アイデンティティ

社会的アイデンティティ理論では、認知作用としてのカテゴリー化、それが人びとの集まりに適用された結果としての集団成員性、そしてそこからもたらされることになる社会的アイデンティティを基本的な説明概念として用いることはここまで述べて通りである。ここではそれぞれについて繰り返すことはしないが、これらは次に述べる集団間の社会的比較の作用と相まって、集団間関係におけるいくつかの現象を引き起こすことになると考えられる。

## 2.4. 集団間の社会的比較

社会的アイデンティティ理論では、先述の社会的アイデンティティに関して、人はその肯定的評価を維持し、可能であればより高い（集団レベルの）自尊感情をもつべく努力するものであるという仮定がおかれている。またこの目標を達成するために人は集団間の社会的比較、すなわち内集団と外集団との間の比較を、内集団に有利なように試みるのだとされる。これに関連して、互いに利害関係のない人々が、便宜的に2つに分けられただけで内集団バイアス（評価・行動において内集団を外集団よりも好む傾向）を示すことが、最小条件集団（minimal group: Tajfel, H. *et al.*, 1971）と呼ばれる実験状況その他で見いだされている。この現象は社会的アイデンティティ理論に基づいて先述の社会的カテゴリー化と集団間の社会的比較で説明されることが多い。

なおこの現象は多くの研究者の注目を集めることとなり、これに関して、少し違う立場から自己評価の明確化（Abrams, D. *et al.*, 1988）や不確実性低減（Hogg, M. A. *et al.*, 1999）による説明などが提出されている他にも、様々な異なる立場からの様々な主張がなされている（その一部は柿本、1997に紹介されている）。しかしいずれの説明モデルが正しかろうとも、結果としてこの内集団に有利な比較ということが高じると、集団間に対立的な関係が生じることになると考えてよいであろう。各種のスポーツイベント等の例を取り上げるまでもなく、様々な現実の集団間関係において、幅広く内集団バイアスが見られることは周知の通りである。

## 2.5. 集団間の地位差と社会構造の認識

上述の内集団バイアスのような現象に典型的に見られる複数の集団間の関係は、それら集団をつつみこむ社会構造のあり方、および社会構造についての人々の認識からも影響を受けるとされる（Tajfel, 1978）。とくに焦点となる複数集団の間に地位差のある場合、その差が正当なものと認識されているか否か、安定したものと認識されているか否か、によってそれぞれの集団成員の地位差に対する受けとめ方や反応が異なることが予測される。

例えば未成年者に選挙権を与えないという状況は、事実としては未成年者にとって不利な扱いと見ることもできるが、それが社会全体のなかで正当で安定したものと受けとめられている限りにおいては、成年者集団と未成年者集団との間の関係は争点になりにくく、したがって対立関係が生じることも少ないと言える。

他方でジェンダー間の性別役割期待や就労差別などを例に取り上げて考えると、これらを焦点として現代の日本ではジェンダー問題が争点化していると言

うことができるであろう。これは、男性・女性というカテゴリー間の地位差（具体的には勢力差）が不当であり、かつ不安定である（変更しうる）と広く認識されるにいたったからであると解釈することができるかも知れない。現代いくつかの先進国において、特にフェミニズム運動のようにジェンダー問題への解決への試みが図られるようになった背景にも、社会的アイデンティティ理論で想定されているような地位差と社会構造の認識に関する同様の問題が横たわっているのかも知れない。

もちろん、この地位差の構造についての認識とフェミニズム思想などの受容度に対しても、先述の準拠情報的影響の原理が作用すると考えられる。各種の所属集団ごとにこの問題についての認識と受容度の違いが見られるのも、このためであると解釈できよう。この所属集団による地位差と社会構造の認識の違い、およびそこから生じる地位差に対する態度の違いは、集団間の地位差と社会構造の認識に加えて、もう一つのダイナミックスをこの問題に導入することになる。しかしこの点については紙幅の関係上、ここではこれ以上触れないでおく。

### 3. 集団同一視の役割と状況の現実感

#### 3.1. 集団間関係と社会的アイデンティティの役割

これまで何度か既に触れてきたが、集団間関係を説明するための重要な原理として、(顕著な) 社会的アイデンティティをあげることができる (Tajfel, H. *et al.*, 1979; Turner, J. C. *et al.*, 1987)。例えばある集団の成員性が自己の一部を構成すると認識する人は (そのことを強く意識する場合に)、集団間状況におけるその集団の目標に沿った判断・評価を行ない、さらにその集団のもつ規範に則した活動を行なうことが予測される。

しかし、実際の人の行動は必ずしもこのように自己概念から演繹的に導かれるわけでないこともよく知られている。先述の現実的集団葛藤理論の主張するように、様々な利害関係によって、(意に反した) 集団間行動が遂行されることもしばしばある。すなわち、(顕著な) 社会的アイデンティティは必ずしも直接に集団間行動を導くとはいえないのである。

#### 3.2. 社会的アイデンティティと集団同一視

そこで、社会的アイデンティティが実際の集団間行動に展開するプロセスを媒介する変数として、集団同一視 (group identification) が注目されてきた (cf. Hinkle, S. *et al.*, 1990 等)。集団同一視とは、人が自分の所属する集団と自己と

Table 1 状況の現実感の大小による集団同一視の大きさ (平均値)

集団同一視項目 <sup>#</sup>	現実感 強群 (n=10)	現実感 弱群 (n=10)	F 値
「自分はこの地域に属しているという気持ち強い」	4.6	3.6	6.08*
「自分の地域に愛着を感じる」	4.6	3.8	3.60 <sup>+</sup>
「自分はこの地域の人たちと一体であると感じる」	4.4	3.1	13.46**

<sup>#</sup> 回答形式は1.「全くそう思わない」から5.「たいへんそう思う」までの5件法  
<sup>+</sup>  $p < 0.10$ , \*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$

を同一視する作用を指す。社会的アイデンティティのうちの、特に具体的な特定の集団の成員性の認識の強さをもたらすこの集団同一視の度合いが、社会的アイデンティティから集団行動を予測することのできる程度を左右するはずである、というアイデアである。

### 3.2.1. 実証データの混乱とその説明

ところがこれまでの実証研究の結果は、全体として、この集団同一視の役割についての理論的主張を十分支持するに至ってはいない。集団同一視の大きさと社会的アイデンティティの作用の指標（としての内集団バイアス等）の相関はそれほど高くなく、特に最小条件集団状況 (Tajfel, H. *et al.*, 1971) ではせいぜい中程度にとどまることがヒンクルら (Hinkle, S. *et al.*, 1990) のレビュー研究以来しばしば指摘されている。

この理由として、ヒンクルら (1990) は、社会的アイデンティティ維持・高揚の様式である「社会的オリエンテーション」が、社会や集団によって異なるからであると解釈している。つまり、社会的アイデンティティの肯定的評価は必ずしも集団間の相対的比較を通して維持高揚されるとは限らない、という主張である。この他にも、集団同一視の測定上の問題 (Rubin, M. *et al.*, 1998) や、検証すべき実験状況の選択の問題が、この集団同一視の媒介効果の弱さに関連する可能性が指摘されている (柿本、2006)。

### 3.2.2. 状況の現実感の影響に関する仮説

ここで、集団同一視の効果に関連する問題を、さらに状況の現実感 (柿本、2004 など) という観点から検討することができるかも知れない。状況の現実感とは特定の状況におかれた当事者が、どの程度その状況にリアリティを感じるのかという主観的感覚を指すが、集団間状況における当事者の主観的な状況認識は、特に社会的アイデンティティという観点から集団行動を説明する上では必須のも

のとなる。状況を集団間状況であると当事者が認識することが社会的アイデンティティ概念に基づいた理論的な現象説明における大前提になるからである。

こう考えると、集団同一視の媒介効果（の弱さ）に関する先の知見を説明する新たな仮説として、次のような説明が成り立つのかもしれない。すなわち、これまでの研究では集団同一視と社会的アイデンティティの関係をコントロールする潜在的要因としての状況の現実感の大きさが、実験状況ごとに異なっていたのであり、それが関連の悪さの原因であるという考え方である。特に集団間状況としての現実感の低い状況を用いた研究では、理論的に予測される集団同一視の媒介効果が弱くなる傾向が推測される。実際、マレンら（Mullen, B. *et al.* 1992）は実験室内で作り出された集団では、現実の集団を対象とした場合よりも内集団バイアスのサイズが小さいことを見出している。

### 3.3. 集団状況と状況の現実感、集団同一視

次に、集団状況において状況の現実感の大きさが重要であることを示唆する具体例を示す。Table 1 は筆者が 2005 年に群馬大学で行なった仮想世界ゲーム（広瀬、1997）で、ゲーム終了直前に行なわれた「世論調査」から得られた結果の一部である。仮想世界ゲームは、比較的インパクトの強い集団状況を作り出すことが知られている（柿本、2003）。

まず状況の現実感を測定する 11 項目から算出した状況の現実感得点（柿本、2005）に基づき、状況の現実感の強かったプレーヤー 10 名と弱かったプレーヤー 10 名を選びだした。この人数は、欠損値があるために除外された 7 名を除いた全プレーヤーの中で、状況の現実感得点のそれぞれ上位と下位 25% ずつにあたる。次に、集団同一視の度合を測定する 3 項目の評定値について両者を比較した（ここでの「集団」とは具体的にはゲームの中で設定されている「地域」を指す。表中に項目内容を示した）。

一見して明らかのように、いずれの項目についても状況の現実感の強かったゲーム参加者は集団同一視の度合も大きかったのに対して、状況の現実感の弱かった参加者はそれほど集団に同一視していなかったことが分かる（Table 1 参照）。すなわち、比較的インパクトの強い集団状況を作り出す仮想世界ゲーム状況においてさえ、強い状況の現実感をプレーヤーがもたない場合は、そもそも集団への同一視の程度が強くないことを示していると言える。集団現象を検討するために実験研究を行なう際には、状況の現実感が十分に保たれるように留意する必要があることを示唆していよう。

今後は、状況の現実感に関する先述の仮説と、集団の実体性（*entitativity*）

(Campbell, D. T., 1958) や内集団の顕現性 (salience) (Turner, J. C. *et al.*, 1987) といった理論的に関連が予想される概念との関係を明確にすることが課題となるであろう。

注)

- 1) 本稿は柿本・熊谷 (2007) の第1、2、4節に基づきつつ、全体を構成し直し、大幅に加筆修正したものである。
- 2) ここでは集団機能を、広く人間集団のもつ各種の働きという意味で用いる。

引用文献

- Abrams, D. & Hogg, M. (1988). Comments on the motivational status of self-esteem in social identity and intergroup discrimination. *European Journal of Social Psychology*, 18, 317-334.
- Campbell, D. T. (1958). Common fate, similarity, and other indices of the status of aggregates of persons as social entities. *Behavioral Science*, 3, 14-25.
- Campbell, D. T. (1965). Ethnocentric and other altruistic motives. In D. Levine (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*. Lincoln, Nebr.: University of Nebraska Press.
- Dunbar, R.M.I. (1997). 言語の起源について 科学, 67, 289-296.
- 濱口恵俊 (2003). 「間の文化」と「独の文化」—比較社会の基礎理論 知泉書館
- Hinkle, S. & Brown, R.J. (1990). Intergroup comparisons and social identity: Some links and lacunae. In D. Abrams & M.A. Hogg (Eds.), *Social identity theory: Constructive and critical advances*. Harvester Wheatsheaf.
- 広瀬幸雄 (編著) (1997). シミュレーション世界の社会心理学 ナカニシヤ出版
- Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes. London, England: Routledge. (吉森護・野村泰代 (訳) (1995). 社会的アイデンティティ理論 新しい社会心理学体系化のための一般理論 北大路書房)
- Hogg, M.A. & Mullin, B. (1999). Joining groups to reduce uncertainty: Subjective uncertainty reduction and group identification. In D. Abrams & M.A. Hogg (Eds.) *Social identity and social cognition* (pp. 249-279). Oxford, UK: Basil Blackwell.
- 柿本敏克 (1997). 最小条件集団状況を用いた集団研究 組織科学, 31, 60-71.
- 柿本敏克 (2001). 社会的アイデンティティ理論 (山本真理子, 外山みどり他編著) 『社会的認知ハンドブック』(北大路書房, 120-123頁).
- 柿本敏克 (2003). 仮想世界ゲームにおけるリアリティ-集団間関係の研究手法としての仮想世界ゲーム-日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 708-709.
- 柿本敏克 (2004). 電子コミュニケーションと集団間関係, および状況のリアリティについて一状況の現実感尺度構成の試みとともに一群馬大学社会情報学部研究論集, 11, 215-225.
- 柿本敏克 (2005). 状況の現実感の諸様相-4つの場面の比較- 『ネットワークRPGを使用した社会的共有認知研究』(平成15-16年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(2)研究成果報告 課題番号15530412 研究代表:有馬淑子), 44-52.

- 柿本敏克 (2006). 状況の現実感が集団同一視と内集団バイアスの関係に及ぼす影響についての一考察. 群馬大学社会情報学部研究論集, **13**, 83-91.
- 柿本敏克・熊谷智博 (2007). 集団とアイデンティティ (潮村公弘・福島治『社会心理学概説』, 北大路書房, 122-130 頁)
- 北山忍 (1999). 文化と心についての実りあるダイアログに向けて—高野・櫻坂 (1997) 論文の意義と問題. 認知科学, **6**, 106-114.
- Kumagai, T., & Ohbuchi, K. (2001). The effect of collective self-esteem and group membership on aggression of "third-party victim." *Tohoku Psychologica Folia*, **60**, 35-44.
- Kumagai, T., & Ohbuchi, K. (2006). Third party aggression: Effects of cooperation and group membership. *Psychologia*, **49**, 152-161.
- Mullen, B., Brown, R., & Smith, C. (1992). Ingroup bias as a function of salience, relevance, and status: An integration. *European Journal of Social Psychology*, **22**, 103-122.
- Rubin, M. & Hewstone, M. (1998). Social identity self-esteem hypothesis: A review and some suggestions for clarification. *Personality and Social Psychology Review*, **2**, 40-62.
- 佐藤達哉 (1999). ステレオタイプとしての血液型性格判断 (『現代のエスプリ』384 号「偏見とステレオタイプの心理学」, 至文堂, 152-161 頁)
- Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., & Sherif, C. W. (1961). *Intergroup conflict and co-operation: The robber's cave experiment*. Norman, Oklahoma University of Oklahoma.
- Tajfel, H. (1978). *Differentiation between Social Groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. London: Academic Press.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Experimental Social Psychology*, **1**, 149-178.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47). Brooks-Cole.
- Tajfel, H., & Wilkes, A. L. (1963). Classification and quantitative judgement. *British Journal of Psychology*, **54**, 101-114.
- 高野陽太郎・櫻坂英子 (1997). “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”一通説の再検討. 心理学研究, **68**, 312-327.
- Turner, J.C., Hogg, M.A., Oakes, P.J., Reicher, S.D., & Wetherell, M. (1987). *Rediscovering the social group: a self-categorization theory*. Basil Blackwell.